

6.27 (土) 開演時間 15:00

第80回 北九州定期演奏会

The 80th Subscription Concert in Kitakyushu

J:COM 北九州芸術劇場大ホール
J:COM Kitakyushu Performing Arts Center Hall

「古典から20世紀へ — 名曲で巡る、刺激に満ちたひとときを」

指揮 **太田 弦** | ピアノ **田所 光之 マルセル** | コンサートマスター (客演) **鍵富 弦太郎**
Conductor Gen Ohta | Piano Marcel Tadokoro | Guest Concertmaster Gentaro Kagitomi

ヨゼフ・ハイドン
Joseph Haydn

交響曲 第88番 ト長調 Hob.I:88 「V字」

Symphony No. 88 in G Major, Hob.I:88, "Letter V"
I. Adagio Allegro
II. Largo
III. Menuetto: Allegretto
IV. Finale: Allegro con spirito

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37

Piano Concerto No. 3 in C Minor, Op. 37
I. Allegro con brio
II. Largo
III. Rondo: Allegro

休憩 Intermission

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ
Dmitry Shostakovich

交響曲 第9番 変ホ長調 作品70

Symphony No. 9 in E-Flat Major, Op. 70
I. Allegro
II. Moderato
III. Presto
IV. Largo
V. Allegretto

6.28 (日) 開演時間 15:00

熊本特別演奏会

Special Concert in Kumamoto

熊本県立劇場コンサートホール
Kumamoto Prefectural Theater Concert Hall

第80回 北九州定期演奏会 | 熊本特別演奏会
The 80th Subscription Concert in Kitakyushu | Special Concert in Kumamoto

6.27, 28 2026

第80回 北九州定期演奏会

主催：(公財)九州交響楽団
共催：北九州市
協力：北九州音楽協会
後援：福岡県
北九州市教育委員会
(公財)北九州市芸術文化振興財団
NHK北九州放送局
九響後援会
助成：福岡県・北九州市
文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
| 独立行政法人日本芸術文化振興会

🗨️ プレトーク

開演30分前から約10分間のプレトークをお楽しみください。

🍷 九響交流カフェ

1ドリンク&おつまみ付き / 参加費500円

終演後、大ホールロビーにて、九響交流カフェをオープンします。参加申込みは開場後ロビー九響受付にて。お気軽にご参加ください。(先着20名)

🎵 楽団員お見送り

本公演終了後にロビーにて楽団員有志がみなさまをお見送りいたします。わずかな時間ではございますが、お気軽にお声がけください。

特別協賛：



熊本特別演奏会

主催：(公財)九州交響楽団・熊本県立劇場
後援：熊本県
熊本県教育委員会
熊本市
熊本市教育委員会
NHK熊本放送局
熊本日日新聞社
熊本放送
熊本県文化協会
熊本県吹奏楽連盟
九響後援会
助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
| 独立行政法人日本芸術文化振興会

🗨️ プレトーク

開演30分前から約10分間のプレトークをお楽しみください。

🍷 九響交流カフェ

1ドリンク&おつまみ付き / 参加費500円

終演後、コンサートホールロビーにて、九響交流カフェをオープンします。参加申込みは開場後ロビー九響受付にて。お気軽にご参加ください。(先着30名)

🎵 楽団員お見送り

本公演終了後にロビーにて楽団員有志がみなさまをお見送りいたします。わずかな時間ではございますが、お気軽にお声がけください。

特別協賛：





© 勝村祐紀

九州交響楽団首席指揮者
Principal Conductor of the Kyushu Symphony Orchestra

指揮 太田 弦
Conductor Gen Ohta

1994年北海道札幌市出身。幼少の頃より、チェロ、ピアノを学ぶ。東京藝術大学音楽学部指揮科を首席で卒業。学内にて安宅賞、同声会賞、若杉弘メモリアル基金賞を受賞。同大学院音楽研究科指揮専攻修士課程を修了。2015年、第17回東京国際音楽コンクール〈指揮〉で2位ならびに聴衆賞を受賞。第30回渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。2025年、第23回 齋藤秀雄メモリアル基金賞を歴代最年少で受賞。

指揮を尾高忠明、高関健の両氏、作曲を二橋潤一の各氏に師事。山田和樹、パーヴォ・ヤルヴィ各氏などのレッスンを受講する。これまでにNHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団などを指揮、今後さらなる活躍が期待される若手指揮者筆頭。2019年4月から2022年3月まで大阪交響楽団正指揮者を務めた。2023年4月より仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者、2024年4月より九州交響楽団首席指揮者。2026年4月より福岡国際音楽大学客員教授に就任。

2024年7月、同年4月に九州交響楽団首席指揮者就任記念コンサートとして開催した第420回定期演奏会のライブ録音のCDがオクタヴィア・レコードより発売、好評を博している。

Gen Ohta was born in Sapporo, Japan, in 1994. He studied conducting at the Tokyo University of the Arts and graduated with honors. He subsequently completed the Master's Program in Conducting at the university's Graduate School of Music. At the 17th Tokyo International Music Competition for Conducting in 2015, he won second prize as well as the Audience Award. He studied conducting with Tadaaki Otaka and Ken Takaseki, and composition with Junichi Nihashi. In April 2024, he assumed the post of Principal Conductor of the Kyushu Symphony Orchestra. A live CD recording of Shostakovich's Festive Overture and Symphony No. 5, taken from the commemorative 420th Subscription Concert, has been released by Octavia Records, and the partnership between Ohta and the Kyushu Symphony Orchestra has attracted growing attention. Since April 2026, he has also served as Visiting Professor at Fukuoka International University of Music.



© Shigeto Imura

ピアノ 田所 光之 マルセル
Piano Marcel Tadokoro

「心と指が完全に一致し、どんな音楽でも自在に操ることができる真の音楽家」(グラモフォン誌)

2021年モントリオール国際音楽コンクールのファイナリストを経て、2022年ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールでジョン・ジョルダノ審査員長特別賞、サンタンデル国際ピアノコンクールでは第3位を受賞。これまで読売日響、名古屋フィル、愛知室内オーケストラ、ウラル・フィル、モスクワ国立アカデミック響、フォートワース響、ワロニー・ロイヤル室内管などと共演している。

日本人の父とフランス人の母の間に生まれ、多様な文化の中で育った幼少期は、田所の音楽観に多大な影響を与えた。名古屋市立菊里高等学校音楽科卒業後、パリ国立音楽院に満場一致の首席で入学。そしてJ-F. エッセール、F. ボファールの両氏に師事し、ドビュッシー国際コンクールでは第2位を受賞。ほかにも数多くのコンクールで受賞を果たしている。同音楽院を卒業してからは、エコール＝ノルマル音楽院に奨学生として入学し、R. シェレシエフスカヤのもとでさらに自らの音楽に磨きをかけている。ほかにもO. ガルドン、M. ラフォレ、E. ポジャノフ、海老彰子、田島三保子、鈴木彩香、長野量雄、水村さおりの各氏にも師事。

Praised by Diapason for his "ease, joy of playing, and panache," Marcel Tadokoro is a French-Japanese pianist whose recent international career has been marked by major competition success and a growing presence across Europe, Japan, and beyond. He won Third Prize and the Bronze Medal at the 2022 Santander International Piano Competition and received the John Giordano Jury Chairman Discretionary Award at the Van Cliburn International Piano Competition. He was also a semi-finalist at the Queen Elisabeth Competition and a finalist at the Concours musical international de Montreal. Recent highlights include a recital in Vitoria-Gasteiz, performances at the Festival de La Roque d'Antheron and the Festival de la Grange de Meslay, Gershwin's Second Rhapsody with Tokyo Symphony Orchestra, Akio Yashiro's Piano Concerto with Nagoya Philharmonic Orchestra under Robert Fores Veses, and appearances with Yomiuri Nippon Symphony Orchestra, Aichi Chamber Orchestra, Tyumen Philharmonic Orchestra, the National Symphony Orchestra of the Republic of Bashkortostan, and the National Symphony Orchestra of the Dominican Republic. His recording of Henselt: Complete Piano Etudes was released on Naxos in 2025.

解説 寺西 基之 (音楽評論家)

交響曲 第88番 ト長調 Hob.I:88 「V字」

ヨーゼフ・ハイドン (1732—1809)

18世紀後半は多くの作曲家がいわゆる古典派の様式の確立と発展に寄与したが、その中でもとりわけその様式の完成に大きな貢献をなしたのがヨーゼフ・ハイドンだった。彼は特に交響曲と弦楽四重奏曲のジャンルで新しい様式の発展に力を注いだことで、音楽史上重要な役割を果たしている。ハイドンのそうした様式上の実験は、特にハンガリーのエステルハージ公爵家の楽長を長らく務めていた時期に行われていった。この時期に作られた数々の交響曲には、彼が様々な角度から交響曲様式の可能性を探っていたことが如実に現れている。

とりわけ1780年代後半から彼の交響曲はきわめて成熟した書法を示すようになる。この時期の彼の交響曲でも特に完成度の高いのが1787年に書かれたと思われる第88番ト長調だ。この曲は第89番ヘ長調とともに、エステルハージ家のヴァイオリン奏者ヨハン・トストがその職を辞してパリに移るにあたり、彼の依頼で書かれたもので、引き締まった構成と主題の綿密な展開法にハイドンの確かな筆遣いが端的に示されている。なお「V字」という題は、ハイドンの交響曲集を出版したロンドンの出版社が番号の代わりに各曲に付したAから順のアルファベット表示でこの曲がVにあっていたことによる。

第1楽章(アダージョ〜アレグロ)は強弱の対比を生かした厳かな序奏の後、緊密な書法によるきびきびしたソナタ形式の主部が発展する。第2楽章(ラルゴ)はオーボエと独奏チェロの奏する美しい主題に基づく変奏形式の緩徐楽章で、トランペットとティンパニも加わって多様な発展を示す。第3楽章(メヌエット、アレグレット)は力強いメヌエット。トリオではバグパイプ風のドローン(持続音)が民俗舞曲風の趣を作り出す。第4楽章(フィナーレ、アレグロ・コン・スピリト)は軽快な主題をもとに生き生きと運ばれる Rond・ソナタ形式のフィナーレである。

作曲：1787年

初演：不詳

使用楽譜：Breitkopf & Härtel

編成：フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770—1827)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンがこの作品を最初に構想したのは初期の1796年頃と考えられている。そして主に1800年にかなりの部分を書き進められた。しかし完成にはさらに時間がかかり、結局1803年の春に、まだ完全ではないながら一応全曲が仕上げられる。この1800年から1803年までの期間は彼の人生の一大転機にあっていた。すなわち耳の異常を自覚するようになり、その悪化に悩んで有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」(1802年)をしたためつつ、その苦悩を乗り越えていった時期にあっているのだ。そうした苦悩の克服を映し出すかのように、この時期彼の作風は、規模の大きい論理的な構築のうちに一層の広がりどドラマ性を持つ中期のスタイルへ転換していく。

そうした過渡期に書かれたこのピアノ協奏曲第3番は、中期の作風に通じる新しいダイナミックな性格を持った作品だ。暗いドラマの性格が支配的で、そうした性格が、スケールの大きさ、綿密な動機労作による劇的な展開法、独奏と管弦楽のシンフォニックな扱いに結び付いて、堂々たるスタイルの協奏曲となっている。初演は1803年4月5日ウィーンでベートーヴェン自身のピアノで行われたが、その後改訂がなされ、1804年に決定稿が成立した。

第1楽章(アレグロ・コン・プリオ)は協奏的ソナタ形式による引き締まった楽章で、情熱を内に秘めた力強い第1主題となだらかな旋律の第2主題を持つ。第2楽章(ラルゴ)は瞑想的なロマン性を湛えた緩徐楽章。第3楽章(ロンド、アレグロ)はきびきびした主題を持つロンドだが、途中で展開部分を挟むなど、ソナタ形式の論理が応用され、最後は長調のプレストのコーダで明るく締め括られる。

作曲：1796年頃—1803年(決定稿の成立は1804年)

初演：1803年4月5日、ウィーン

使用楽譜：Breitkopf & Härtel

編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部、独奏ピアノ

交響曲 第9番 変ホ長調 作品70

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ(1906 - 1975)

旧ソ連の作曲家ドミートリイ・ショスタコーヴィチが、政府(ソヴィエト共産党)の強い芸術方針(社会主義リアリズム)と自らの芸術家としての信念の狭間で苦悩しながら創作を続けたことはよく知られている。交響曲第9番は当局に対する彼の反抗心が現れ出た作品だ。

この交響曲が作曲されたのは1945年、第2次世界大戦が終戦を迎えた時期のことである。政府当局は国家を挙げて戦勝を祝い、作曲家としてソ連を代表する立場にあったショスタコーヴィチにはそうした勝利を表現する交響曲を期待していた。彼自身もある機会に勝利の交響曲を作曲中であることを述べていた。

ところが8月末に完成された交響曲第9番は、当局の望んでいたような壮麗な勝利の交響曲とはおよそほど遠いといえる古典形式を借りたディヴェルティメント風の軽妙な作品だった。当然ながら当局はこの裏切りに激怒し、この作品を社会主義の革命精神から外れた形式主義として厳しく批判する。

もちろんショスタコーヴィチはこの作品で単に伝統形式による古典的作品をめざしたのではない。彼がこの作品で古典形式を皮肉っぽくパロディ化していることは第1楽章を聴いても明らかである。それはきわめて痛烈なもので、ショスタコーヴィチは古い形式のパロディをとおして当局の側こそがまさに形式主義であると当てこすったのだといえるだろう。奇数楽章を中心に一見明朗な愉しさを感じさせる作品だが、その裏には当時のスターリン政権に対するアイロニカルな反骨精神が息づいているのである。

初演は1945年11月3日にレニングラード(現サンクトペテルブルク)において、エヴゲニー・ムラヴィンスキーの指揮するレニングラード・フィルによってなされている。その後この作品に対する批判がひとつのきっかけとなって、1948年にはショスタコーヴィチやプロコフィエフをはじめとするソ連の作曲家たちの形式主義に対する当局の大々的な弾劾(ジダーノフ批判)が行われることとなるのだった。

第1楽章 アレグロ

ソナタ形式によるが、その扱いはパロディックで、想定外の不協和音やからかうような楽想の挿入など、皮肉な精神に満ちている。

第2楽章 モデラート

叙情の中にも不気味な緊張感が漂う緩徐楽章。

第3楽章 プレスト

快活さの中にアイロニーを織り込んだスケルツォ。

第4楽章 ラルゴ

荘重かつ悲劇的な表情を湛えている。

第5楽章 アレグレット

民俗舞曲風の主題によったフィナーレで、明るさのうちにも複雑な表情が入り混じる。なお第3楽章以降は続けて演奏される。

作曲：1945年

初演：1945年11月3日、レニングラード

使用楽譜：全音楽譜出版社

編成：フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッドシンバル、トライアングル、タンバリン、弦5部

 演奏会のご感想をお寄せください

6月27日 / 第80回北九州定期演奏会のご感想はこちらから →



6月28日 / 熊本特別演奏会のご感想はこちらから →

